先生方へのメッセージ
プロジェクトリーダー　佐竹敦子

今回日本の先生方に授業プランをご紹介するにあたって、私がプログラムに込めた思いや、大切だと思っていること、子どもたちとの関わり方と立ち位置、そして、これまで子どもたちと一緒に活動してきて感じている手応えなどをぜひご紹介したいと思います。

私たちが大切にしている要素は以下の４つ。それを踏まえて大きなゴールへと向かっていきます。

ゴール）自分たちが発言・行動することで社会を変えていけるという発見にたどり着く

１）子どもたちと同じチームの一員になる

私たちは常に、自分は子どもたちと一緒に課題解決に向かって考え、行動していくチームの一員として接しています。教える、教えられるという向き合う関係ではなく、子どもたちと一緒に同じゴールをみて手を繋いで歩いていく、そういう気持ちでいるし、それを子どもたちにも伝えます。そうするとあるとき、子どもたちがいつの間にか自分の手を引いてくれるようになる。そしてそれをしてくれるのは、決して普段成績の良い子ではないかもしれない。そこにまた、私たち自身の発見や気づきが生まれてきます。先生だってわからないことがあっていい。「先生もわからないから、一緒に考えてみよう。一緒に調べてみよう」という姿勢が子どもたちとの距離を縮めてくれるでしょう。

２）発見のファシリテーターになる

　私たちはいつも、子どもたちの探究心を信じて「答えを与えない」ように気をつけています。事実を学ぶことから彼らの中にピピっとアンテナが立って、疑問が生まれたとき、どういう質問やヒントをあげたら、その子自身が「答えを見つけよう」と思ってくれるかに注力しています。アクティビティーやディスカッションでも、「指導」するのではなく、子どもたちの生の声を「聞き取り調査」するつもりで質問を投げかけているのです。そして「へえ、そうなんだ、細かいところまでみてるんだね、私も気づかなかった」というようなエールを送ってあげる。また、子どもたちが発見したことを緊張せずに言語化する機会を作るようにしています。クラス全体での「発表する」形だと、発言の得意でない子の貴重な発見が埋もれてしまうし、大人の求めている意見を言おうとしてしまう。子ども同士でのシェアなどにして、「ジャッジメント」されない、本音を言いやすい環境を作って、私たちはそれを観察するようにしています。

３）自分の言葉で伝えるチカラを育む

　自分の言葉で伝えたことが「聞いてもらえた」「わかってもらえた」と感じたとき、子どもたちの中の自己肯定感レベルがアップします。自分の言葉で伝えるチカラには個人差がありますが、それほど得意でなかった子も、練習と成功体験で上達できるのです。私たちがよくカメラを使うのはその「エクササイズ」をするためなのです。もちろんカメラがなくても、二人一組でインタビュー形式にしたり、レポーター役を作ったりと、工夫してその機会を作ることができます。そしてクラス内で日常的にアウトプットの機会を設けるようにするだけでなく、クラス以外で試す機会も段階的に設けていきます。他のクラスや下の学年、校長先生、地域の大人、地元の議員、というような感じです。

　その中での小さな成功体験の積み重ねが、自分の言葉で伝えるチカラを育み、「ちゃんと話せば、聞いてもらえる」という自信が芽生えていきます。それが先生が考えたスクリプトを読むだけになってしまうと、彼ら自身のビクトリーにならないので、事前にスクリプトを書く場合でも、子どもたちの伝えたいコンセプトを最大限にリスペクトし、最小限のアシストで自分達に書かせるようにしてください。

４）社会を変えたい時には誰に対して発言すれば良いのかを明確にしてあげる

自分の言葉で伝えるチカラがついてくると、子どもたちの中に「もっと色々な人に伝えたい」という気持ちが生まれてきます。そのときに、社会の仕組みがどうなっているのか、自分達が市民として行政に意見したいときには誰に言えばいいのかを示してあげることが大事です。そして、市民として発言する権利があることも大切な要素として必ずカリキュラムに組み込みます。そうやって発言するターゲットが見えたら、子どもたちのエネルギーが倍増します。そして議員

さんや市長さんなどに自分の言葉で提言できたとき、「社会は変えていけるんだ」という発見につながっていくのです。初めは自己紹介さえ恥ずかしがっていた子が、堂々と議員さんの前で発言できた、その誇らしげな顔に、私たち自身が勇気をもらう、そんな体験をぜひして欲しいです。